

西村遠里『居行子』：解題と翻刻(二)

吉田， 宰
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/2547984>

出版情報：文献探究. 56, pp. 14-37, 2018-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



西村遠里『居行子』―解題と翻刻―(二)

凡例

- 一、本文には適宜、句読点・濁点・半濁点を付し、段落をもうけた。
- 一、字体は通行のものに改めた。
- 一、疊字は「々」「ゝ」「ゝ」「々」等で表し、二字以上は「〳」「〵」で表した。
- 一、合字はひらいた。
- 一、不審箇所には右脇に(ママ)を付した。ただし、ルビの不審箇所はルビ中に(ママ)と記した。
- 一、本文・ルビのうち、版木が欠けたと思われる箇所や墨でつぶれている箇所等は()で補った。
- 一、敬意を表す闕字は反映していない。
- 一、丁うつりは、「(丁数オ／ウ)」とし、原則、底本の丁付に従った。
- 一、割注は「」で表し、改行は反映していない。
- 一、左訓はルビ中に「／」を置き、そのあとに記した。
- 一、文字の入力が困難な場合は「Ⅱ」で表し、そのあとに()で注記を施した。

翻刻

■目録

居行子巻之二

目録

長生之弁
ちやうせい の べん

形勢の教訓
けいはい きやうくん

冥加之弁
めうが の べん

まどの月

傾城の弁
けいせい の べん

(1オ) (空白) (1ウ)

■本文

居行子巻之二

長生の弁
ながいき の べん

吉田 宰

夫人世の欲し貴ぶ所のものは、福祿寿の三つにして、わけて寿を以て第一とす。古人もいへることく、富天下にもかへざるは命なり。螻蟻のごとき小虫にいたるまで、生とし生るもの、いづれか命をおしまざるはなし。

南斗星は人の生るゝことを司どり、北斗星は人の死する事を司どるといへども、誰か南斗星を祭る人もなし。是うまるゝは天地の自然にして、いかなる才智の人も今宵の樂みに男子を一人こしらふとて、出来るにもあらざれば、只仏神にあてどなしに願かけるより外はなきゆへなり。北斗星を祭るは「(2才)たれ人も命のおしきは同じおもひなれば、祭る人多し。

さほどにおしき命なれども、其性命をたもつ根元をしらず。上たる貴人はもとよりにて、命を大切にせんと欲して、却て命をけづる事のみをして、福祿のゆたかなる人ほど、下々にも兎角命みじかし。貧き下賤のものにいたりては、今日の食用におはれ、天命をけづるべきわざは、財宝に乏ければ心のまゝになりがたし。是非なく身をはたらき拵ゆへに、我しらず天命をたもちて、天然を以て終るゆへに、下賤貧窮の者に長命多し。

然れども、貴人は勿論、下々にいたりても、寒暑燥湿風の外邪に冒れ、世をはやふ辞する人多ければ、古人の言のごとく、人世「(2ウ)七十古来稀にて、長命は成がたきものぞかし。

惣じて、命みじかくしては、物事成就しがたし。諸芸・役者等の上をみて、上手・名人の名譽を取は、皆六十已上にて、五十以下にてはまだやう／＼若手を行ぬけし処にて、名譽を取にはいたりがたし。むかしより何事にて、名高きこゆるは大かた老人なり。若手にていかふ名高ければ、かならず過失あぶなきものなり。西行法師が命成けりと詠じられしごとく、命があればあひがたき事にもあひ、大望をもとげ、稽道も終には名譽を取。しかれば、養生を大切に生て長生をねがふべき事なり。

抑長寿たらんことを欲せば、先人は小天地にして陰陽の間に生れ、何事も天地と同じ理にあらざればたもち「(3才)がたき事をしるべし。上古のいにしへより春夏秋冬の序、生長収蔵の功、日月の運行、寒来暑往、いつか一日けふはやすみといふ事もなく、万物を生育して陽に長じ陰に消し、自然にまかせて止時なし。如此の氣をうけて生るゝものなれば、生るゝより死期一すじの息のたゆるまでは、何もせず安樂する事はならぬこととおもふべし。

郭橐駝がいひしごとく、此方より木の寿ながふして且孳からしむるにはあらず。木の天に順ふて其性を致をもつてなりと。人も又そのごとく、此方より命ながからんことを欲して、補藥をのみ、安逸を求め、脾腎に菓なる物といへば、魚肉野菜いろ／＼取とゝのへ、欲ふかく喰て、美色に心を奪れ、房室過度して「(3ウ)性命の根

元を耗散し、これを樂とこゝろへ身の辛勞をいとひ、命のながからん事を欲し、却て命を縮るはこれ他なし。人の天に逆ふて其性に順ならざる故なり。

草木を植てこゝろみるに、日蔭の陰湿の地にをけば、青々と潤ひはあれども枝葉よはく孳ることなし。潤ひなき旱魃の地にをけば、枝葉こはく枯燥して又しげることなし。日もてり潤ひもある所にてても風のとをらぬところなれば、虫多く枝葉もむせて繁茂せず。日もあたり雨もかゝり露もうるほひ風もとをる所に植て、あまりもてはやさず捨をけば、天の自然を得て、かぎりなく生長し枝葉孳く榮るなり。人も又そのごとく、気苦勞も心勞も身のはたらきもずいぶんして、「(4オ) 雨にもぬれ風にもあたり、暑さにもあひ寒さにもあひして、かるき食を大分喰て、ほどよく心身をやすめ、毎日かくのごとくして、身に応ぜぬ大望をおもはず、世上の事に多欲ならず、たることを知てこゝろをやしなへば、天地の自然にまかする道理、榮衛の氣血よく順行すれば、風寒暑湿温疫等の外邪も、皮膚に間隙なければいるべき所なく、命ながからん事を欲せずとも、自然に長生なるべきなり。愚およばぬ事ながら、若年より棄駝が伝を見て、身をたもつ事五十年、六十に向としていまだ命期いつなることをしらず。今日にあらんや、古稀にいたらんや、しるべからざるは誰も同じ。此趣きを以て天命をたもたば、大抵長生なるべきものなりとおもはる。」(4ウ)

しかれども、愚つら／＼按ずるに、世上の長生なる人其身に堪能多き人は、七十になりても八十に成ても人にあかるゝ事もなく、尋とふことおほきゆへ、いつまでも長命ならんことを人々祈りて、世界の穀潰にもならざればいふもさらなり。此方ごときの無能の者はいつそ百歳のかたこして長生すれば、いやしき山がつにても盃をいたゞくの、いはひのもちをあやかるのと長生のかひあり。又能なきものも五十にたらずして死ねば、人にもおしまれ、かはゆがらるゝ事なり。五十以上より九十ぐらひまでのあいだは、としよりよ老耄よと人にうとまれ、女色・遊戲の樂もなくなり、おもかげはかはれども心はかはらぬものなれば、若き者のたのしみ羨敷、終には老ひがみの心いでき、若き者をいじり、いろ／＼の「(5オ) 無理をいふも、あきらめさへよければなきことなれども、其あきらめよき人は十人にふたり。大かたは世にいふ吝氣にて心ひがむことぞかし。

さる人の親の年賀に杖をまいらすとて、つく杖の竹の心になぞらへて直にあれな老の行末とよみたるは、真実の孝心とおもはる。目は霞耳は蟬なき齒は落て、雪を載くすがたとなりて、知命・耳順と歴て来たうへには、世のさまうつりかはり、つねなきは世のならひなれば、自分の若かりし時の事は一つも間にあはず、いひ出す事は古めかしとわらはれ、今の流行ごとはしらぬがちにて、人々もとよりなればむつかしがりて、いひきかさぬことおほければうと／＼しく、

覺へ度とおもふことも物わすれして覺へず。又死期のちかき(5ウ)事をおもへば何となくあじきなく、五行を天地にかへすくるしみの有さま、さきへ行し人々の事を思ひ出せば気味わるく、何をおもひ取たる事もなければ、仏法にたより出家のすゝめをたのみに、朝夕やかましく木魚よ、たゞき鉦よ、小磬よとたゞきたて、来世のことをねがひさはぐも心ならず、是非なきよりのことなり。

八十に成老翁にても色よき花の酒宴の場にて、口になかなひしうまさかなにてもうちくひ、むかしにかへる口てんがうにてもいひて居るがおもしろきか、信心する和尚の御法談に冥加銭の世話してゐるがもしろひか、心にとはゞしれんか。仏名が有難きといふは是非なきゆへの事なれば、そのやうに人にうとまれ長生せんことは望も(6オ)なき事なり。兼好法師もさるすき人なりしゆへ、四十ばかりで死んだがよしとつれづれにいふたのは、おしまれて死ぬるがよしといふことならぬ。若ものゝ大病にて死にのぞめば、なき命なりとも一日なりとも、とりとめたきなど人々もおしむ。老衰の人なれば忠臣蔵の淨瑠璃に、おかるがとゝさまはをとしの上といひしやうに、たれも口にはいろ／＼と挨拶いへども、心のうちはもやおしむことにもあらずと、けふよあすよとかたづきをまたれ、三日七日と延引して人々にたいくつせらるゝもつらき事ならずや。

かやうのことをおもひみては、逆も百年余は心もとなし。七十八十

の長生ものぞましからざれば、六十にもならば浮世のひまをもらひ、おもがけのおとろへしははづかしながら、色と花(6ウ)とに心をうつさば、枯木のかじけしほめるやうにもなくて、生涯を終らんか。酒色の樂に天命を縮めてとしからるゝは人におしまるゝあいだの事。六十すぎなば誰をしむ人も有まじければ、酒色の樂が毒し成てはやく命期きたらば幸とおもふべし。

寿長ければ辱をゝし。廉頗も藺相如と兩人趙国を守護し、廉將軍といはるゝ時分に死なれば、後に小便に度々行とやらそしり言をいはれたり。大食大酒をのみ喰して使者にみせたりするやうな、老後の恥はあるまじ。それとも長命にて大功をなせし人、和漢すくなからず。さやうの有功の人は愚がわる口の場所にあらず。無能小器の人にての事なり。

生の有うちは天地への奉公に何なり(7オ)ともすべき事なり。神散質破る後は空然大虚に帰して長短をいふによしなし。ながきもみじかきも命有うちのことのみ。それゆへ、愚五十五年を一生とさだめ、此後は我一生の外と思ひ、五十年を慎み来りし思ひ出に、おもふまゝに酒色に耽りてと思へど、老人にはおもしろふ相手に成てくれる人もなく、自分の陽も心にまかせず、青楼・岐館はあきらめにも力にもいかぬ金銀にさしつかへ、いきらるゝまでいきる氣で深草の隠士にならふきでも、たとへ持あまる長者でも里の銀にはつ

まるもな(ら)ひといふたほどの事にて、けんしきにもまゝならぬ、金銀の矢種やねづかぬ事ことゆへ、心と口とばかりで、弓弦ゆづるかけしやうにひつばつていふて」(7ウ)みてもおもふやうにもならず。かはゆひ男の為でなふても、たれも金かねがほしひなとなんぼ色々いふてみても、かくや三味線さんみせんはひひてくてもあらふけれど、二階かいから三百両りやうはらり／＼と蒔まてくれる人がなければ、ひしやくの損そねるばかりがめに見ゆれば、手水鉢てうずばつもたゝかれず、ぜひなくたゞのおやぢの場ばにてむなく命期めいごにいたらんこと口くちおしくをもふのみ。こゝろあらん人はさつしたまへかし。

形勢の教訓

長月ながつき七日の頃空ころからもうち曇り、秋もはや深く成行なりゆきば、売買商人うりかひあきびとも声さむく、火桶丸火ひをけまるばちめきて、風も身にしみ物さび」(8オ)しく、彭沢ほうたくの会くはいによばるゝ心あてもなければ、つれ／＼と詠ながめをりて、物ものの哀あはれは秋ぞまたれると口号くちごうば、家の小女おんなかたはらに居侍はべりて、花園ぞのの胡蝶こてうをさへやといはまほしといふ。娘むすめながらもさこそあんなれ。春はるを好すけるものをとたはぶれつゝ、げにや汝なんぢが春はるをすくもことはりなり。花の隠逸いんいつなるものといはれたる菊きくも今は富貴ふうきの家いへのもてあそびとなり、君子くんしなるものといはれし花も学文潜上がくもんせんだしやうの為ためとなり、蓮はちすをすけば雅人がじんのやうにきこゆるゆへ、濂溪れんけいおやちと同やうの顔かし

て、どこらが蓮はすのよきところやら知人しるひともなし。牡丹ぼたんはもとより自分の持もちまへ、むかしを今いまに富貴ふうきなるものにて、春はるをすき牡丹ぼたんを愛するは是これ当世とうせいなるべし。」(8ウ)

すべて唐からも大和やまともむつかしひおやぢ達が、人の心花なりに成ゆくとてやかましけれど、人間界にんげんかいに花をぬきては一向いつかう一日もたてらぬ事なり。陽ようはたつとく陰あんはいやしとて、世よの春はるに梅花ばいかの匂におひなからましかば、若木わかの婿むすめどのも杵きねばかりでは子餅こもちもできじ。震吹すそふきかえす紅裏もみうらも大宮人おほみやびとの装束しやうぞくも笑わらひをおほふ袖屏風そでびやうぶ。花あればこそうき世よはよけれ。まことや花実くはじつははなるべからず。陰いんあればこそ陽ようも尊たつとし。柳やなぎはみどり花は紅くれないのいろ／＼も、花ゆへにこそ詠ながめ多おほけれ。実じつほどよきはなしとて、花なき人はそのさま憔悴せうすいてみるもきたなし。花ものいはねど盛さかり木この下もとにはおのづからなる道みちもつけとて、花をのみ」(9オ)飾かざりなば心の矩のりもゆがみつゝ、かたみにちぎりし袖そでのうみすゑの松山波なみこえて、終つゐにあかるゝたねならじ。

惣而さうして、男も女も粧よそほひ飾かざりの形勢けはいはほどよきこそおくゆかしけれ。言いふもいやしき譬たとへながら、生なまざかなを調味てうみすればうまきことはうまけれど、はやく厭あかるる心地しぬ。法魚ひもの・鯉魚しほものの属たぐひはかたくからびて味あじあし。一塩ひとしほの生魚なまものは花もあり実みもありてほどよしとやいふべき。老若らうにやくは魚うをにもあり。その性せいの飯うまきと餛飩うどんからざるとは生れつきの妍かほきと醜みにくきとに同じ。塩しほのからきとあまきは此方このほうからすることなれば、形勢けはいをこ

れにたとふべし。汝も二七の女の身なり。弁慶ならぬ七つ道具をかしらに飾、文月の地藏に似たる白粉に、黒紅の唇（九ウ）いといやし。流行模様時々の染色までも、皆おほくは戯場の真似のおほければ、心ざまのみゆるもつらし。只いつとてもかはりなき常盤の物ずき、染色も三つの道具も、じんじやうにいやしからず、髪も品よく梳り、垢や臭ひのなきやうに、いろどる事をやめにして、身だしなみよくつゝしみて、花実をわすれ化粧せよといへども、いつかしら川夜船入相のかねにをどろきて、むやくの説法冥加銭の出し人もなければ、くれをかぎりにとりまぎれてやみぬ。

冥加の弁

世上の人冥加の事をいひ、冥加なしの冥加にあまるの、冥加に（10才）かなふのといふ。此事唐土にはいはざることにて、冥加と連続したる文字も見あたらず。これと和邦にはじまること葉にして、日本記神武の巻に、冥廬といふ事出たり。すべて和邦のことばに、神明の冥罰を蒙るなどいふ、冥は暗也とくらきことなり。加はくはふるなれば、おぐろふしれぬかたより、我身にくはへらるゝといふ心にて、冥加にあまるなどいふならめ。

然るに、世上の人身にすぎたる奢がましきことをするか、又は無益の費をして、物入のをく成事をうか／＼としてゐるを、冥加し

らずといふ。世人のおもふ所と愚がおもふ所と違ひあり。世上にいふところ、始末と儉約と吝嗇と冥加と、此四つをおなじやうにもふ人多し。をの／＼その（10ウ）分別あり。

始末とは物のはじめおはりといふことにて、金銀の入用すくなくすることをいふにはあらず。古人のいへることく、惣而、衆人みな万の事によく始あらざることなし。終あることなしと。諸芸の稽古万事のつとめ、其終をとぐることにすくなし。何事にてもなかばにて廃、諺にいふ通、尻やけ猿とやらいふやうなるは人のならひなり。それをさやうになきやうに、万事はじめをはりをよくするを、始末をよくするといふ。金銀の費を省ことにかぎりておもふは大なる違ひなり。

儉約とは二字ながらつゞまやかとよみ、又つゞまるともよむ。是無益の費をはぶき、其用を節にほどよくして、せねばならぬことには費なることにても、おしむ心すこしも（11才）なく、其身に応ぜぬ奢がましきをせず、質素にして経済をよくするをいふ。俗にいふ、身上持のよきのを、儉約をよくするといふ。修身・齐家・治国・平天下の本なり。晏子春秋に、晏子景公の間にこたへ、或は諫をのぶる治国の言に、儉を本とせざるなし。

吝嗇とは二字ながらおしむとよむといへども、世人のおもふところと違ひあり。晏子曰、吝者君子之道、吝愛者小人之行也。称二

タケハカリ シカウシテコレヲ セウヨウス
財多寡一而節二用之一。 富無二金蔵一、 貧不二仮貸一。 謂二
シヨクトイフ セキタ ヒトニ ワカウコト アタハズ シカウシテアツクミツカラヤシナフ コレヲ リントイフ ヒトニ
之 蓄一。 積多不レ能レ分レ人而厚自養。 謂二之吝一。 不
ワカウコト アタハズ アタミツカラ ヤシノフコト アタハズ
能レ分レ人又 不レ能 二自養一。 謂二之愛一。

これを以てみれば、蓄は金銀をためたがりもせず、又人にかりも
せず、身上の物成の多き寡きをはかり、「(11ウ) それほどづゝに
くらしゆくをいふ。これは君子の行ひとなり。吝は多く積蓄へても
財宝をおしみ、人世の義理のかけるをまかはず、非道の財宝にても
とかく身につくをよるこび、人に情をかけることもせず、貪欲にて
己が榮耀或は飲食嗜欲のたのしみにのみは金銀を出し、人を恤筋
の事は一向せざるなり。愛とは吝のごとくする上に、死ぬるときは冥
途へ持ても行やうにおもひ、仏説にいふごとく、妻子珍宝及王位臨命
終時不隨者のところへ心もつかず、財宝は結構なるものながら、生
涯をたもち身をおさめ、人を恤にこそ大切なれ、死後に黄金を堆
ふして、北斗をさしても生前寸刻の楽にもあたらぬ事をも」(12
オ) しらず、めつたに財宝をほしがり愛するをいふ。人間の糟也。此
類の人世上におびたゝし。

冥加とは前にいふ通、おぐろふしれぬかたより、めぐみを蒙るこ
とをいふなれば、たとへば仕官人なれば、自身の心にはさしたる功
もなき奉公とおもひてゐるに、おもひよらず御褒美として、御加増に
ても頂戴するか、または拝領物にてもするか、なるときは思ひよらず

御めぐみをくはへられしとよろこぶこと葉なれば、平常にていはゞ、
たとへば灯火をとぼすに、油おほくいりて、吾身上の為にあしき
やうにするととも、冥加しらずとは云べからず。これ儉約をしらぬと
て叱るべき事なり。油はすくなくゐるととも、無益の」(12ウ) 油
を一掬にても費さば、これ冥加しらずと咎むべし。家内の下人自分
のために灯火を掲て油を費すとも、冥加にはかゝらぬ事なり。し
ばしにても主人の為にみならず、下人の為にみならず、無用の灯火
を心つかずともしをかば、これ冥加しらずなり。

其故は、抑農家に秋のすへより地ごしらへをして菜種を蒔、冬よ
り春にいたり菜のかぶをわけて植かへ、あるひは根に土をかけこやし
をかけて、いろ／＼人力を費し、造化のめぐみに花をさかし、実の
りてこれをかりほし、からをはたきちりを去、俵にして仲買の手にわ
たし、問屋の庭に入、しめやの手にかゝり、やう／＼油商人の手に
入、わが庭に」(13オ) 入来り灯火の用をなすまで、幾何の人の力
を費して出来るや。一滴の油のうちにもその人力の功はこもれり。
しかるを何の益なく、無用に費すはこれ天地の費、その人力の功
をおもはぬといふものなり。これ冥加しらずといふべし。木綿・絹布・
米穀・器財、万物何にても、此意趣は相おなじ。をの／＼思ひみるべ
し。

吾身上の物入の多寡はこれ儉約不儉約也。冥加とは人の心の付さ

るところの人力を、無用に費す費さぬのことかと思ふゆへ、世間の人の吾財宝のつゐへる費さるの事によりて、下人等をしかるとて、冥加しらずといふはすじ違かと、童蒙の為に書つゞけ侍る。」(13ウ)

窓の月

世の中に山のおくにも鳴鹿の、こゑきかでに此ごろは、こゝろさびしき秋のそら、我身ひとつにあらねども、ふせやの軒はことさらに、萩の音づれ身にしてみて、曇る心のかゞみにも、すぎしは移る世のうさや。

おろかなる身を思ひみれば、この身公卿・大夫の家にも生れざれば、詩歌管弦の翫ぶにもあらず。藩屏の家にもあざれば、孫呉の書に心をつくすにもあらず。英才博識の器にもあざれば、諸子ひやくかの書を解するにもあらず。浮図氏にも入ざれば、出離生死のことはりをもしらず。神職にあらざれば、唯一の秘事をも知らず。有職の家にも生れ(14才)ざれば、節会儀式の故実をも知らず。楽工の家にもあざれば、南風の占をもしらず。申樂の家にもあざれば、能はやしの事にも疎く、医家にあらざれば、青囊の術をもまなばず。卜巫家にも生れざれば、卦象の占もしらず。農家にあらざれば、たがやしきつ耕耨て豊年の秋を樂にもあらず。匠家に生れざれば、公輸子が

工もなし。商家にあらざれば、貨殖にうとく、陶朱が富もなし。宋朝が美にもあらざる身は、妾女・妓女の樂みもすくなし。士農工商をはづれしあやしの一匹夫にして、なにをなし得し事もなく、いたづらに暑往寒来て白頭の悔ひ忽にいたりぬ。嗚呼、悲ひ哉。然れども、熟世のありさまを按るに、(14ウ)天子の御身にも思なきことあたはず。逆徒の為にくるしめられ給ひし事、代々の実録に載られしごとく、其ためしすくなからず。逐一にいひのべんもかしこし。いはんや公卿以下をや。

菅丞相つくしに左遷せられ、篁遠流の罪をえ、行平須磨にさすらへ、業平の東下り、藤房の通世、楊雄閣より投じて死し、楊修漢中に殺され、孔明功を半にして五丈原に死し、范增諫をふせがれ、空行路に没し、項羽股夫の為に、鳥江に亡され、呂布曹操がために害せられ、張飛覆首をかゝれ、関羽臨沮に斬せらるゝ属、和漢挙げかぞふるに違あらず。

聖賢のうへにも患難をのがれたし。西伯姜里に囚れ、孔子陳に困る。伯牛(15才)癩風を病、子路衛に死す。

釈門に入事は頼阿・西行等のとき人はいふもさらなり。世上におほく姿かたちのみを墨染によするといへども、心の迷ひの凡俗にかはらぬは鵜の真似をするからすとやいはん。鵜ならましかば水にいらてもよしとせん。出家の戒行苦みすくなからず。

人を救ふの医術はねがふべきことなれども、篇鵲秦に殺され、華佗曹操のために害せられ、倉公少女緹縈が孝を以稍刑を免る。

農家は井を堀て飲耕して喰ふやうなれども、朝には霧を冒し、夕べには星をいたゞき、旱魃をなげき霖雨をうらみ、耕し耨て草筵に飲食し、手あしを泥にまみれて稻田姫を育、税務にたしなめらるゝ事おもひ」(15ウ) 幾何ぞや。

工商の器財をつくるも、おもひをつくさざれば人これを愛せず。寒夜にともし火を掲て、深夜に至り、長日に汗を流して、昏に及ぶ。職のために寸陰をおし、月の夜雪のあしたの楽しみもまれなり。

商家の人は貨殖をなすに、貨物の貴賤に心をくくるしめ、人々の直ならぬにおもはぬ散財をなし、畜積の功を折。此苦幾何にかあらん。

神職・有職・楽工等の人々も、各其道の苦み少からず。美子仮も寵おとろへては刑せられ、楊貴妃場鬼の土となる。

かくいへばうらやむべき人もなくして、予がごときあやしの匹夫をよしとせんや。否、もの各陰陽の道理をはなるゝことなし。苦楽得失は「(16才)陰陽なり。楽みはこれ伸にして陽なり。春夏の生長する処。苦みはこれ屈にして陰なり。秋冬の収蔵する処。陽は伸て人の好ところ。陰は屈して人の悪所。天地の内に生をうけ、なぞ苦のみにして楽なきことあらんや。またたのしみのみにして

苦みなき事やあらん。苦みあれば、必楽みあり。車の両輪のごとし。陰陽かた／＼立事なし。

我もし公卿・大夫の家にうまれなば、其苦みを勤て其楽みを楽まん。我もし工商の家に生をうけなば、其苦みをくるしんで其楽をたのしまん。黄金をもつて刀を作り、鉄をもつて箔にのべんに得べけんや。黄金のたからたるも剣を得ざるの不徳あり。名剣の徳をうるの黒金も」(16ウ) 錆を得るの不肖あり。天下の人くるしみなき事あたはず、楽なき事なし。

しかるに、世人己がくるしみを知てたのしみをしらず、他のくるしみを察せずしてたのしみをうらやむ。愚がごとき心よりおもひみれば、うらやむこともなく、かなしむ事もなし。君子は入として自得せずといふ事なしとかやきゝぬ。家居を広く建つらね、よろづの物にきよらをつくし、山海の珍味を集めて、膝を容、口に適ふにすぎず。仏の貴きも人を救ふの願ありときく。閻王なを罪を改むる役あり。螻蟻も己が楽みあらじ。人として生を楽まざらんや。古人いへることあり。分を安しもつて福を養ひ、胃を寛してもつて氣を「(17才)養ひ、費を省てもつて財を養ふ。

愚がごとき者は何事を望とも、かなふべくもあらぬ身のよはひもはやかたぶきぬれば、何をかのぞみ、何をかなげかん。天地の始終、一身の生死、有無の由てしかるゆえんは、庸人のかる／＼しくきは

め知るべき事にあらざれば、何とおもひとりてしも、心一すじにおもひ定て、すゞしからんことをねがふのみ。西行法師も讃岐院の御墓にまいりて、よしや君、むかしの玉の床とても、かゝらんのちは何にかはせんとよみぬ。年々春草を生ずる墳墓も終にはすかれて田となる。あゝ、死をかなしまば生をたのしめ。

予がごとき蕎麦好は死後に百味の祭を「(17ウ)得るとも、生前一器の蕎麦にしかず。貧しといへども、春は山路の華を尋ね、春ふかく日数をさへもわかず、五月雨のころは、余所にすぐる郭公のおとづれをまち、橘の花の香にふりにし人をしのび、秋はよすがら虫の声にこゝろをすまし、冴まさる月にこしかたをおもひ、軒のしぐれに哀を催し、雪のころに成ぬれば埋火のもとにより、菜菔の羹に夜寒をわすれ、一二の友に教を聴、うき世のくるしみをつとむるのいとまには、又己が心になふのたのしみありと、ふつゝかにおもひとりたるより、人のみるべきにもあらぬもしほぐさ、かきつゞくるも愚がたのしみの一つに侍る。」(18才)へ世の中は心からなれたのしみもうさもつらさも宮もわらやも。

傾城の弁

世人傾城といへば遊女の事なりと思ふ人あり。大なる誤なり。今戯場の雑劇に、遊女のことをけいせいといひ、狂言の外題に、け

いせい仏の原、けいせい二神山などいふゆへに、さやうにおもふ人あり。近世自笑などが契情といふ文字をこしらへて、専らけいせいといふ。夫ゆへ、世上傾城を遊女のこととおもふやうになれり。

傾城といふは美人の通称にて遊女にあらず。其始漢の世より起れり。前漢書に、武帝の時、李延年といふ者、音律を得てよく歌ふ。常に侍して君恩を蒙る。或時帝の前にて起て舞ふ。「(18ウ)うたに曰、北方有二佳人。絶世而独立。一顧傾城人。城一再顧傾城二人。国一と。武帝歎じて、今善世に豈かくのごときのひとあらんやと。平陽公主の言、李延年在妹なりと。武帝即刻召て見給ふに、実にたぐひなき美人なり。しかもよく舞曲をなせり。こゝに於て、恩寵を得て、李夫人と称せらる。これ其始にて、其後美人の通称となれり。

遊女のことは浮女とも云、又戯女とも言。いにしへこれを傀儡と言。遊女・傀儡二つながら古く和歌の題にも出たり。白川殿七百首の内、前左大臣の歌に、船中遊女といふ題にて、心から哀あだなる契かな、ゆきかふ舟にかはす心は。同七百首のうち、為氏の歌に、岸頭傀儡といふ題にて、「(19才)へ河岸の波のよるへ契にて、つままわぶる苦やかた哉。又順和名抄に、漢語抄を引て曰、ヒルユウカウスルコレヲ ユウヂョウトヲ ヨルヲ マツテイインボンヲ ハウスルモノコレヲ ヤホツトイフ 昼遊行 謂二之遊女一 待レ夜而発二淫奔一者謂二之夜発一 又曰、

クハイライシ トウインニイハク クハイライ ワメウク グツ ガクニシノ ロウスル トコロナリ ガクシカ
傀儡子、唐韻云、傀儡 和名久々豆。樂人之所^レ弄也。顔氏家
訓云、俗名傀儡子。為^二郭禿^一。遊女のすがたを木偶につくりて舞
せしものを、傀儡師といひしなり。玄恵の庭訓にも出たり。今世上
にいふ、でこのぼまはしなり。これ人形劇場のはじまりなり。

又ながれの女といふは、或説に平家八島にほるびてのちに、宮づか
へせし多くの官女共、身の置所なきまゝに、長門の赤間・播磨の室
の津などにて、旅人に身をまかせ、情をうりしより、つゞゐて津の国
神崎・江口・（19ウ）三島など、すべて津々浦々にて小舟に乗て淫
をうるゆへ、流れの女とは名付そめしなり。流といふより川と縁を
とり、うきふしといはんとて川竹とつゞけて、遊女の事にいひならは
せしなり。

又今祇園町の白人といふものは、遊女ならぬ白徒といふ心にて、
名付そめしより、名目となりたるなり。世俗云、町出等の心にて、そ
のはじめ遊女の諸芸にうとき白徒と云心なり。白徒・白人相通ずれ
ばなり。管子の注に、白徒は不練の卒。武芸なきなりと有。相通ず
るなり。

今言契短とは、みな卑賤の遊女の通称なり。辻君は文字の通、町
小路の辻に立て淫を売ゆへにいふ。ソウカとはいかゞ書や。愚いまだ
しらず。ある説に（20オ）惣嫁と書といふ。是非をしらずと云。

島原の大夫といふも、むかし京の六条三筋町に、第一の女郎を五

拾三奴に定、五三の君といひける。其頃女郎に能をさせけるに、大
夫の役は第一の五三の君の役なるゆへに、人々大夫／＼といひけるよ
り、今にいひならはして称号となれりとぞ。

松の位といふことは、もろこし秦の始皇帝、泰山にのぼりて下る
とき、暴風雨至る。始皇松樹の下に宿りて、其樹を五大夫に封ぜ
しこと、史記に出たり。故に、大夫といふによりて、松の位とい
ふ。天神を梅の位といふも、松に次で梅の位といふに付、梅は菅家
の紋所なれば、天神と名付たるなるべし。

扱亦今の舞子・芸子はいにしへの白拍子のことなりと（20ウ）
おもはる。平家物語にいはく、我朝に白拍子の始りけることは、
昔鳥羽院の御宇に島の千歳和歌の前、彼等二人舞出したりけるなり。
始め水干に立烏帽子、白鞘巻をさみて舞ければ、男舞とぞ申ける。

しかるを中比より、烏帽子・刀をのけられて、水干ばかり用ひたり。
さてこそ白拍子とは名付けれとあり。また徒然草には磯の禪師、又
其女の静より始るといへり。清盛の妾、妓王・妓女も白拍子なり。
其後加賀の国より仏御前といへる白拍子のぼりて、相国の御前に
て今やうを舞うたふ。そのうたに、君を始めてみる時は千代もへぬべ
し姫小松、御前のいけなる亀が岡に、鶴こそむれゐてあそぶめれと推
返し／＼三返（21オ）うたひすましたりければと云々。

今の芸子・舞子の舞うたひ、三味線等の事からおもひ合すれば、三

弦は信長已後のものなれば、三味線とはなし。さて／＼おもしろからぬ事なれども、堂上堂下ぎゝめき立て、おもしろがりしとあれば、世の風のうつりかはる事しるべきなり。今の世にさやうなこと、たれかおもしろがるべき、色めきたる事もなし。古風なるものなり。

妓女と書てみちの女ともよみ、妓婦とも書。それゆへ、遊所を妓館とも、又青楼ともいふ。遊所の客を漢名に、標客といふ。

勾欄の役者野良を、戯子とも男倡ともいふ。野良は治郎なり。李白が採蓮曲に、岸上誰家遊治郎と作れり。」(21ウ)女の形のごとく作り、なりふりよき男を治郎といふ。今のやつなり。故に、今色どる男子を遊治郎といふも、この故なり。

又遊所にて物事なれて功者なるものを、粹と云。粹に作るべし。悪ずいなどいふときは、推の字なり。わるく推量するといふことなり。

又島原・新町・葭原等の遊女町をくつわといふ。今にては女郎屋をくつわといふ。誤なり。類書纂要曰、花柳苑〔遊女町の事也〕行_{ジン}人忘_ニ孝・弟・忠・信・礼・義・廉・恥八者_一。かるがゆへに、忘八と云と。これもまた非なり。五雑組には、密夫したる女を忘八といふといへり。和邦遊女町をくつわと云は轡の字也。伏見の遊女町よりいひはじめたり。伏見の遊女町はじめは円形のかこひにて、其郭中〔22オ〕に十文字の道ありて轡の形のごとく、故にくつわと号たり。後に十文字の道をふさぎて、其形丁の如し。よつて、撞木町

とは名付けしなり。元来轡とは郭の名也。又遊所・客屋の妻を花車といふ。是も間違なり。今嶋原なんどにて大夫・天神に附てゐるやりての事なり。もとこれを岡両といふは、めつたに抓たがるといふ心なり。本草時珍曰、一作二〔鬼十岡〕軀。好食_ニ亡者_一肝。唐土にて葬_ニとき_一に、方相とて鬼の面をかぶり、岡両をふせぐ事なり。周礼にみへたり。それを今艶にやさしく、花車の字に取替て、花車さん／＼とよびて、客屋の鼻のことに成来れるなり。

居行子巻之二終 (22ウ)

■目録

居行子巻之三

- 目録
- 儒者之説
- 犬莊子
- 酒茗論 (1オ) (空白) (1ウ)

居行子卷之三

儒音ジュオン。學者ガクシヤノシヤウ之稱。楊子ヨウシ法言ホウガンニイハク曰、通テン二天チジン地ニツウ人ズルヲ一ジュツト曰レ儒イフ。周シウ禮ライニ

日、儒以^{イハク}道^{ジュハミチ}得^{モツ}民^{ミン}。風俗^{フウゾク}通^{ツウ}曰^{イハク}、儒^{ジュ}区^ク也^{ナリ}。言^{イフ}能^{ベツ}区^ク別^{ベツ}古^コ今^{キン}
 也^{ナリ}。これらの注^{チュウ}を以^{もつ}ておもふに、天地^{てんち}人^{じん}の道理^{だうり}に通^{つう}じ、能^{よく}古^こ今^{こん}を区^く別^{べつ}
 し、道^{みち}を以^{もつ}て民^{たみ}を得^え、大^{おほ}にしては天下^{てんか}を平^{へい}治^ちし、国^{くに}を治^{をさ}め、小^{せう}にし
 ては家^{いへ}を齊^{との}へ、身^みを修^{をさむ}るの学^{がく}を勤^{つとむ}る。これ儒^{じゆ}者^{てや}の本^{ほん}意^い也^{なり}。

按ずるに、孔門の書にかぎらず、諸子百家の書その意趣まち／＼にわかれども、身を修ることをしらんが為なり。大学にあるごとく、身をさまれば、おして齊家・治国・平天下にいたる。浮図氏の「（2オ）七千余巻も月をさす指のごとしといへるも、そのみをしるの外他なしといふのぎなり。

然れども、人におさめらるゝ野人は、文華なしとも済べし。君子たる身には文学なければ、野にして人をおさめ安撫することかたし。故に、行有ニ余力一則以学レ文。文質彬彬然。後君子となる。棘子成がごとく、君子は質のみと思ふは大なる誤なり。文猶レ質。質猶レ文也。我を博するは文にして、我を約やかにするはれなり。もし又文質に勝ときは、則ち史にして誠実すなく、史官はれなり。もしいつて、女為ニ君子儒。

どうぞん
じゆ
じゆ
シカニ
イツテ
イハク
ナンヂクシンノ
ジュツナレ

シヤウジン^ノジュニナルコトカレ。無^ニ小人^ノ儒^一。程子曰、君子^ノ儒^一為^レ己。小人^ノ儒^一為^レ人。
 タメニス。子^ノ曰、古^ノ之學者為^レ己。今^ノ之學者為^レ人。
 タメニス。イニヘノガクシヤハレガ。タメニス。イマノガクシヤハヒトノ。タメニス。

しかるに、今時儒者と称^{なまじきしやう}」(2ウ)するものを見るに、何某は朱^{なにがししゆ}子^し学^{がく}、何某は古義堂^{こぎだう}の門人^{もんじん}、某は徂徠^{そらい}の門葉^{もんよう}、某は陽明^{やうめい}の学派^{がくは}、某は道学淵^{だうがくえん}氏の門派^{もんば}なりなど、各^をおのれが門戸^{もんこ}をかまへ、たがひに他門^{たもん}をそしめること、無学^{むがく}の衆人^{しうじん}より我慢^{がまん}甚^{はな}しく、専^{せん}ら名利^{めうり}を求^{もとむ}ることを務^{つとめ}、つねに患^{むと}二人^{ふにん}之不^の己^の知^ち一^{いつ}。故^{ゆゑ}虚^こ譽^よ雖^レイヘドモツトクスハチヤムナリ。

隆而美德則病也。

まづその朱子学の門人といふ者を見るに、德行を尊ぶといふを以て文学をいやしめ、元祖と尊ぶ朱子は、楚辞のやうなもので註をせられし。博覧のことはさたなしにして、歴史・詩学・文学・諸子の事には甚疎く、小学・近思録等のやうなものにかゝりゐて、文を以て我を博くすることなければ、いづれも田舎おやぢのやうなる人相（三才）になり、漢土・日本の風土の異なる事もわきまへず、日本の政道にも三年の喪のおこなはれざるをうらみ、姿形は男女七歳にして席を同ふせずと、めつたにかたくろしふしてみても、元來日本の水土に生れ、時勢違ひ唐土の形義作法、千里を隔たる日本人の中心にては、油に水のまじりしやうにて、われも何とやらん面白からねば、内証にてはすまぬ身持、出家の女色をたのしむ趣にて表をかぎり、己が門派の会合に世上をそしり、朱子・程子の糟粕をの

み嘗、時務にあはぬ事のみをいふてゐるゆへ、人情にうとし。国郡を治ることはさてをき、一村の庄屋も心もとなき趣。大家の先生ときこえし人も、貧き（3ウ）くらし。賢不肖の似てもつかぬに心もつかず。顔子・蔽子のともがら、貧にありしを手本にしてゐるゝもあり。また書生多人数にあつてゐるゝ先生も、めつたにかたくろしく、曹洞宗めきたるところありて、今時身を修るには、人づきあひあしく、質文に勝たるゝち、まことに野なりとやいふべき。

道学先生の門派、これ又其趣意相似たり。同門より合ては、今もし行路に鳥目百錢落てあらば、掇たるがよきや。また捨ゆかば道にやかなはん。取てかえり貧者にやらば、如何など（い）へるたぐひの事を議論して、心持の自反かくやあらん、とやあらんなど、いふやうなことに、日をくらし、「（4オ）いづれも不経済なる人多く、内証は他借銀のふらち、買がゝり等の断、耳を掩て鈴を盗たとへのことし。聖門の本意を得る所へはゆくまじ。比丘めきたる気味ありて、かやうの衆中は一町の宿老の取捌さへ、つとまりがたきこととおもはる。世界には悪人多くて、右のやうな事いふてゐるやうな、とろひせんぎでは、少の人のたばねもならぬものぞかし。一家をおさめるにさへ、善悪の人情によく通じねばおさまらぬもの。いはんや国天下の大なるをや。先国を富し、衣食足て、榮辱を知、刑罰教答は国

家になければおさまらず。孔子も大司寇となりて、定公を相て、夾谷の会にてのはたらき、又相のことを撰行といへば、早速（4ウ）少正卯を誅し、中々右言やうな小き了簡、婦人の仁にて聖門の道は、ゆかぬことといふに心もつかず、費隱の章の一枚伝受も心もとなし。

古義堂の門人今はすくなし。三十年ばかり以前、荻生の学文以前の外おこなはれ、其門派みな、孟子・程子・朱子等の諸賢をそしり、堀伊藤等の諸儒をうち、荀子（マ）をほめ、于鱗・世貞等を尊び、何のわきまへもなき書生までも、甚たかぶり、朱子の註を一遍よむ事だにせず、朱子学の趣意は如何にと得意もせず、しらずながらに徂徠の聲に付てめつたにそしり、万犬虚にほゆるこゝろ見るしき事なり。書物も徂徠学の書とて（5オ）表紙も唐本仕立にして、徳行のことは一向に廢してはいはず。華音をならひ樂器を翫び、聖門の学は大夫以上、政務にあづかる者ならでは、用ひがたき趣に説なし、徂徠かくして自身書記と称し、儒といはず、もつぱら文字のみにて、古文作家とて、文華の力競のみにて、学者の風はなはだしくなりたり。まことに文勝質則史といふべきなり。

徂徠先生其身一世の秀才博識なる大力にまかせ、質朴風の学者を文章を以て云ふせ、学文をすれば夸々矜々のこしをしと成たるは、荻生の学派よりいやましなり。論語徴をあらはし、世上の耳目を

(5ウ) おどろかせし事、大力に似合ざる不思議あり。明岳啓山が著述の書に、談経と云書あり。此書其以前一部渡りて官庫にあり。世上知る人なし。但徠是を拝借し、一覽終り返上す。秀才にまかせ其意趣を己が意とし、論語微を出せり。其後年移り、談経世上に流布するに付、岳啓山の意と徠と、暗に符合すといふに成たり。又論語為政の篇に、子張学レ干禄、といふを徠徠の説に、禄を求る事を学ぶにはあらず。干禄はいにしへの書名也。子張干禄の書を問なりといへり。これ己が新發を輝かす也。

衛靈公篇に、子曰、君子謀道不レ謀食。耕也鋤在二其中一矣。学(6才)也禄在二其中一矣。この文干禄の章と相通ずる歟。多聞闕レ疑、慎言二其余一、則寡レ尤。多見闕レ殆、慎行二其余一、則寡レ悔。言寡レ尤行寡。梅禄在二其中一矣。此文の意と相考へみるべし。

如レ此のるいまゝあり。まことに英雄よく人を欺くならまし。荻生は英才大力、楊雄・王世貞が徒なり。徳行の儒者にはあらず。故に、其門葉文学を以人にたかぶり、徳行をいふことを嘲り笑ひ、文人を尊び酒をたしめ、唐詩をうたひ琴を鼓しするたぐひを学者の翫びとし、青楼のことはいふもさらなり。ならずものゝ行跡を識めるの人とし、身の慎には大に害あり。これも聖門の本意ともおもはれず。

いづれの学者もをしなべて、(6ウ) 儒者とさへいへば風雅を稱し俗をいやしめ、何事も唐の真似するを是とす。中庸にいはいはく、君子素二其位一而行。不レ願二乎其外一。素二富貴一行二乎富貴一、素二貧賤一行二乎貧賤一。素二夷狄一行二乎夷狄一。すべて聖門のをしへは今日のこののみ。道は人に遠からず。人に遠きは道とすべからざる事なれば、俗事をいやしむる事もそむけたる事なり。其身日本の地にむまれ、日本の政道を受ける身にして、和邦の風を嫌ひ、唐の風をたつとぶ事すまぬ事なり。道理は和漢同じかるべき事なれば、その道は尊敬すべきことなれども、衣服・器財・飲食等の事は、水土のちがひにて日本にあはぬこと大分あるべし。なんぼ聖人の(7才)作法にても、井田の法を以て今日本の税務の法則をたてんとせば、一つも事なるべからず。唐土の衣服を着ては、いかにも表むきはつとめられず。俗な麻上下ならでは礼義にならず。たとへ儒者ばかりの出会いにても、献立に牛肉や、家猪や、鶏などのたぐひばかりにて、唐流の料理して膳をすへば、こまりの事もおほかるべし。万事此意味なること大分あり。おもひ見るべし。

聖人の道は、とかく今日の身を修、家を斉へる事をまなぶのが本意なれば、さまざまに門戸をかまへ議論しても、今日の身のおさまらぬことなれば空論なり。孔子用ひられたまはざりし故にこそ、六経も(7ウ) あれ。もしもちひられて天下国家を治めたまはゞ、禹湯文武

周公のごとき、別に書物は有まじ。書経を以て見るべし。書経は其時の国史なり。史記・漢書等と同じきものなり。今日の事を書記したる書なり。故に、いづれの書にても、和邦に用ひてなきすじの事ならば、一章や二章わけのしれぬ所ありて、除て置ても聖門の間答を、今身に引当て、身を修るの要用になる所を得意せば、一章にても、誠に聖門の学文なるべきが、論語中にも告朔の羊の章やなどは、品をかへて今に引当るにあらざれば、日本になき事ゆへ、其注のよしあし」(8才)のせりあひもいらぬ事ぞかし。

それとも儒者みせ張て渡世する人は、古人の言をしる物にして、買手の書生をあつめ、沽ことなれば、六経・四書・史記・左伝・漢書・晋書・世説・唐詩選・明詩選の類も、をの／＼しろものなれば、少にてもすまぬ所があれば、其代物取ものとなりて、買手が合点せぬゆへに、随分やくにたゝぬ事までも、吟味よくして、瑕のなきやうにせねばならぬは尤なり。

商ひものにせぬ身には、熊沢先生のごとく、集義和書のやうに、書物もひらがなきにして、門戸のかざりはいらぬなり。君子儒の己が為に」(8ウ)する人はみなおなじ。人の為にする人はみな聖学の糟粕をのみ大事にかけ、まことの所はなき事なり。莊周が寓言も、列子の趣意も、そこをいふなるべし。

たとへば論語の中にも、德行によりし答論は、すぐに身にうけ

きゝてすめども、さもない今にあはぬ所は、我身へひきおろし考へ学ざれば無用となる。道二千乗之國一、敬レ事而信、節レ用而愛レ人、使レ民以レ時。これらの章を千乗の国をおさむることゝのみおもひては益なし。此方一身にひきおろしていへば、万事を敬しつゝしみ、」(9才)約にたがはざるやうに、人に信をうしなはず、俟約をわすれず、家内の入用をほどよく節にし、諸人に愛をよくし、人を惡まず、家内の人を仕ふにも、自用につかふには、家内のせねばならぬこと、商家なれば商用、仕官人なれば公用がりの表用、妻女をつかふには、縫物勝手向の用事のさはりにならぬ其手透の時にいひ付つかふ様にすれば、おのづから家内の人帰伏して、一人つかふても上下恥を知、礼を知、一家よくおさまる道理なり。

又直哉史魚、邦有レ道如レ矢。邦無レ道如レ矢。君子哉蘧伯玉、邦有レ道則仕。邦無レ道則可ニ卷而懷レ之。この章のごときも又おなじ。一身に引をろしてみれば、世上はいかゞ」(9ウ)あろふとも、自分さへ直を守ばよしとすれば、直のみさは立ども、身危し。世上に直道をよろこび、政にまこと有てよければ、出身して仕、直を心のまゝに人にとり合てもよけれど、若又世上あしく政みちなきやうすにて、人の物をかすめ取ても、己が勝手をするを知恵とおもふ趣なれば、身を退き事をひそめ居れば、身あやふからずと心得、用ればすぐに此身の教と成。

此心にてみれば、聖門の書は勿論、歴史・諸子百家の書、各勸善懲惡、教にならずといふことなし。前にいふごとく、今の儒者は本職はなく、空名にして稽者同然なれば、よろづの稽者会釈どうぜんにて、さのみ尊敬すべき事にはあらざるべし。」（10才）

犬莊子

名の名とすべきは常の名にあらず。名なきは天地の始なり。こゝに上京に何某とて、うとく成町家あり。相続の家業をつつがなくつとめ、齢も知命にちかく、よろづの事にこゝろがけ、手跡・算術衆人よりまさりて、わけて卜筮・人相の術におもひを竭し、各師伝の上工夫をこらし、将来をさすこと、見通し法印も手をおくほどの奇妙あり。茶香の風雅にも心をよせ、諸事の勘弁工夫は智慧の海に書あらはすよりも功者にて、する事なすこと、無用のはたらきなく、無益の費なきことを考れば、身上夜にまし、日にまし、「（10ウ）繁榮して、万事富饒に心のまゝなるべきことぞかし。其上見識を莊子によりて、自然の道を楽しむ。まことに万事たんだくの人といふべきなり。」

然れども、天道はおもふやうにもならぬものにて、此近年親類のがれぬあいだに、常になき難渋どもかさなり、捨てもおかれず、とれば身にかゝり、おもはぬ身上のいたみとなり、おきふしわかず世話に心

をくるしめ、病人うちつゞき家業がたにも、おもはぬ損失おほく、かれやこれやと心苦おほく、近來は何とやらんものごとく儉約のみになりて、むかしのやうにも見へず。其身も退屈して氣病を煩ひ出し、すがたも陽氣（11才）すくなく、顔色も血色なく青ざめ、馴染の医師心をつくし、自身耳学文のちく齋に医案を附て養生すれども、とかく常にならず。

此ごろは出家遁世の人をうらやみ、年齢より弱々しくくらしめるをみれば、數年心をつくせし卜筮も、諸人の吉凶は占ひやれども、たとへのごとく、自己の将来の難儀兼而その備をなすべき益にもならず。何某の高弟にて、奇々妙々の相術も、自家将来の病人、吾身の病氣の事を知て覺悟をなしたるにもあらざれば、人相をしらぬ人もさしてかはる事もなし。世人にすぐれし勘弁工夫も、是非なき難儀かさなれば、身体（11ウ）のよはみになりて、其ふせぎを人にまさりてなすにもあらねば、大事に功なし。

われは自然をたのしみ、莊子の意を得たりとおもへど、取ちがへあればこそ、心苦かさなれどまぬかるゝみちをしらず。自然をたのしむ所をうしなひ、心屈しまよひて、浮図遁世の人をうらやみ、遁れても、命のうちは浮世にて、峰の薪や谷川の水に心もつかず、世話のすくなきといふ、出家とばかりに心つき、これをうらやむ。莊子の意を得意したるものならば、人事を尽したるうへは、天の自然にまかすべき事

なれば、将来の吉凶存亡を兼てさくらんこと、何の益かあらんや。

ト筮は聖人の手に成たる易経を本とする事」(12才)なれば、衆人はもとより、学文の徒にいたるまで、名に拘泥してまよふといへども、愚がおもふは易学の弁に、詳に弁ぜしごとく、聖人の易は教を本とし、ト筮を借て、其理を明すほどの事なれば、人事を尽すの上、道にそむかざらんの吉凶を、鬼神にたゞすにあらんか。祢宜・山伏のうせ物・まち人、或は近年行れし、射覆等のなぐさみ・翫びの類にはあらざるべし。世俗の上自反の一事さへつとめ得ずして、鬼神にたゞしとふてことをはかる所にいたらんや。

相学は人相の弁にくはしく弁ぜしごとく、聖人の経に出るにもあらず。たとへ柳子の妙を得ても、来年の備を、かねて相者の言のごとくなしをせば、表むきまたは五倫の(12ウ)人情にそむきしこと出来て、今日の上すむべからず。人身の上は、其人／＼のなすべきやうの人事を尽すより外他なし。明恵上人の教のごとし。

莊子も妻女の喪に、缶をうつてうたはんや。まことはなごりをおもふてなきたるならん。かなしむべきをかなしみ、よろこぶべきを悦び、かなしみにもやぶれず、たのしみにもなかれず、姿は衆人におなじく人のしらざる所天地自然の妙を得意して、水火に入ても心のまよはざるを以て、真の莊子をする人といはまし。

愚莊子を学ざればその本意を知らずといへども、彼がごときは、こ

れ糟粕のみ。何の得る所あるや。火に入てやけず水に入ておぼれず、皂にすれどもくろ」(13才)まず、前に有かとすれば、忽然として後にあるの妙を得るの知識たりといへども、雪のふる夜は寒くこそあれ、凡情にかはらぬを以て、道德堅固の人とす。

人に莊子学なりとしらるゝ人ならば、末を問はずして臆ものなり。徳の徳たるはまことの徳にあらずとかや。まこと大悟の人は、衆人と同じく、凡俗の眼にみゆるものにあらず。ト筮・相学を信じて、将来を知事を尊まば、口に莊子を称することなかれ。道の自然を樂まば、将来を知る術をやめよ。口に莊子を称じて、術にト筮・相学を尊信す。これ東行と称じて、西に歩するがごとし。嗚呼、可笑のはなはだしきなり。世人これをとがめずして、その人(13ウ)の利口に惑されて識あるの人とす。衆人の鼻欠猿、むかしより今におひて同じきのみ。

酒茗論

春雨のいとしめやかにふりつゞき、霖雨さびしき賤がふせやに、ひとりふたりの友人尋きたり。浮世がたりなどするうちに、鍔の泌音のしきるに促され、建城を開て茗を烹、徒然の眠をさまし、杜康をまねひて以て風塵をわする。

友人のうちに茶を好人あり、酒を好人あり。酒を好人愚にすゝめて

曰、老兄酒を飲ども楽むに至らず。足下のごとき性質沈重にして、若冠より疾病常に聚をうれふ。それ聚の疾たるや、七情の気鬱結するに因て痰飲を聚、或は飲（14才）食停積し、終に能堅硬杯塊のごとくなる気あつまれば、心下否硬し、気散ずれば柔軟なり。其上足下わかかりしときより、夜常に寢覺多し。茶を嗜で心を澄さば、いと衛陽のめぐり渋て、ねざめ多く、聚をうれふるにあしかるべし。兄のごときは酒を嗜で大に其益あるべし。酒は血脈を通じ、腸胃を厚ふし、皮膚を潤し、憂を消し、脾気を養ふ。折ふしに沈酔して、鬱滯を散ぜば生をやしなふの助ならん。

茶を好人のいはく、これ大成辟事なり。彼人自己の好所にひかされ、酒の徳のみを挙て、其害をしらず。酒は大熱にして毒あり。其気の猛烈なるを以て、よく気をめぐらし鬱を散じ、憂を破り、破憂將軍と名付れども、頗る怒気を（14ウ）発し、久く飲ば神を傷り、湿熱腸胃を腐爛し、筋骨を軟かにし、終に寿を損ず。ことさらに主人聚をうれふる。因て時々気急痰氣の疾あり。所謂喘息に似るの痾なり。其ときは一滴の酒をも飲ことかなはず。物各其性あり。鶴の脛・鳧の足もうけ得たる所なり。

酒を好人の曰、生茶を好む故に酒の小害を挙て大徳を貶す。天に酒星あり、地に酒泉あり。本草已に酒名を著し、素問亦し酒漿あるときは、其始黄帝のころにして由てきたることひさし。漢土にしても

冠昏燕卿いづれか酒にあらざるなし。吾朝にても素盞烏尊、脚摩乳・手摩乳をして、八醞八甕の酒を醸さしむと旧事記に見へたれば、神代よりのことなり。今世俗の上にてても貴賤と（15才）なく、目出度事にも喪祭の事にも、吉凶とも酒を用ひずといふことなし。君臣・夫婦・師弟、其外何事のかためにも、盃をとりかはし約をなすのしるしとす。礼記にも飲酒のれいはあれども、茶礼ある事なし。茶を好人の曰、生酒を好むゆへに茶礼なしといやしめ、我酒をたしまざるを以て、酒の事をしらずとする歟。生の為にわれこれを弁ぜんと。足下のいふ、天に酒星あり、地に酒泉あるはいづれも人意にいへるところ。いづれの神あつてか、天地開闢より、某の星酒星たり、それがしの酒泉たるを告んや。

本草已に其名ありといへども、これ亦炎帝の名をかるといへども、三国六朝あたりの書なり。その書（15ウ）近世始て附見するものあり。地名又前後漢の時分に名付し処をしるせり。内経亦黄帝の名をかるといへども、其文章を見るに、六国秦漢の間に偽作したる書なりとおもはる。或説に少康より始るといひ、文選の注には、杜康黄帝のときの人なりと。又黄帝内伝にも、王母会山にして黄帝にさけをすゝめし事をいふ。又空桑稷麦を醢して、醇醪をなすと。又戦国策に、儀狄は帝女酒を作て、これを禹にすゝむ。禹これを甘じて遂に儀狄をうとめりと言。古史考・呂氏春秋亦同。博物志・玉

篇・陶淵明集、各杜康これを作るとす。魏の武帝の樂府にも、何
以消^レ憂。惟有^二杜康^一とつづれり。杜氏は「(16才)もと劉果
のすへ、商の時冢韋氏たり。武王これを杜國に封ず。後宣王のため
に誅せられ、子孫晋に奔て杜を以て氏とす。杜氏周の時にはじまり、
其後杜康といふものよく酒を釀^カを以て、世にしられたるならん。此
人始て酒を作るにもあらざるべし。

右諸説紛々たりといへども、いづれもたしかなるよりどころもなし。
又堯酒千鐘といふこと、孔叢子にあれども、委巷の説なれば信ずる
にたらず。貝原氏曰、いにしへの智者これを作りて、天下後世に伝
へてよく廢ることなし。故に、聖人も人の好む所のものを絶ず、郊
廟享燕に用て以、礼の常とし給へり。いにしへは飲食するときに
臨で、飲食をはじめし所の「(16ウ)人を祭る。然ども、其始
て酒をつくれる人を以たゞ先酒とのみいひて、誰とすといふことを
いはざるときは、いにしへより其事詳ならずなるべしといへり。
我朝にも旧事記に出たるおもむきは、神代の事はかるべからず。こ
れを始めとしがたし。古事記には神功皇后三韓退治まし／＼て
後、誉田皇子氣比大神を拝礼の留守に、酒をかもして皇子帰りたまひ
しときこれをすゝめ、皇子歌をよみ給ふ。武内大臣答歌し給ふ。こ
れを酒樂の歌と言。又応神天皇の御時、百濟國より酒を釀^カ
こををする。須々許理といふ人をわたし、酒をかもして献ることあり。

これはより酒製法くはしく成^{ナリ}「(17才)たりとみへたり。これも始る所
を詳にせず。

漢書食貨志云、酒天之美祿。帝王所下以頤^ニ養天下^一、享祀
祈上^レ福、扶^レ衰養^レ疾。百礼之会非^レ酒不^レ行。
又云、酒百藥之長。これ皆酒を賞して其能をいへるなり。

篤信曰、誠に酒は賓主觀を合、親疎情を慰し、衰を助け、
病を養ふの具。愁をやぶり、藥を佐るの物なり。故に、少飲時
は則經を通し、氣を壯にし、甚人に益あり。おほく飲時は則
火を助け痰を生じ、大に人を傷る。且久しく酒を飲時は神をそこな
ひ寿を損ず。しかのみならず、酪酏甚しき時は、謹直の
人も変じて狂妄の徒となり、志慮を昏し、時を廢し、事をうしなひ、
其職業「(17ウ)に怠り財をやぶり、家を亡し、或は酔に乗じて
は、言まじき事をいひ、すまじきことをなし、身のわざはひをまねく
ことおほし。其醜態備り極るときは、妻孥のために姍笑はれ、親
戚に忌にくまる。古人酒を称して狂藥といひけんは宜ならずや。
しかるに酒は量なし。乱に及ばずとて、聖人もすてたまはざるは
此ものもと、祭祀のそなへとし、地に灌ぎ神を降して、其馨香の下に
達するを取。これ陰に求るの儀也。後にそのよく陽を養を以て、
故に親に奉じ、老を養ふ。又よく觀を合るを以のゆへに、こ
れを冠昏の礼・賓客の会に用ひ給へり。しかれ共、賓主百拝して

酒三行と云。又終日酒を飲で酔ことをえずで、未嘗過飲に及」(18才)ばず。しかれども、吾儕は欲を懲ことを得ずして、やゝもすれば盃を挙て、平生の懷をわすれ、可なるにかなふてやむ事なく、沈酔に及で常度を失ふこと多し。

凡人の病も酒によりて成もの多し。窃に見るに、おほく酒を飲すごして、穀を少く食ものは毎々寿みじかし。禹の旨酒をにくみ給ひしも、後世に禍多からんことをはからせ給ふなるべしといへり。誠に世上酒を嗜で常に飲ば、酒毒に腸胃を腐し、内損するに至る。人又は過酒によつて身をあやまる人、目前みる所のごとく、如此徳ありといへども、其害また甚多し。われ故にこれをいやしむのみ。

酒を好人いはく、生のいふ所われこれをきゝぬ。生のたしむ茶の徳」(18ウ)及び其礼を聞ん。

茶を好人のいはく、茶は寒にして毒なし。痰熱を去、氣を下し、食を消し、志を悦ばしむ。唐土にては、神農氏より起ると茶経に書。和邦にしては、上古よりの事にして、挽茶の節会とて内裡に於て行はるよし、海女の藻芥に出たり。陸羽が茶経、清逸高遠、上は王公に通じ、下は林野に逮ぶ。亦雅道なり。和邦にしては、足利將軍義政の頃より茶礼起て、千利休に至て大に備る。世人のしる所なり。今貴賤となくこれを翫び、茶礼に於ては尊卑のへだてな

く、官武ともに盛にして、賓主礼を正し、親疎情を和し、大人といへども、手づから茶を進めて鄙人に謙譲す。」(19才)和国の一大礼となれり。故に、老兄などこれをたのしめば、人に睦じく、徒然の憂ひなし。酒の痰を生じて、氣急に害あるにまされりといふのみ。酒を好人のいはく、生茶を好むを以て、茶の徳をあげて害をいはず。われこれを解して、足下が酒の弁に答んのみ。それ茶は神農本經に載るといへども、足下の弁のごとく、六朝の比の書なるときは、往古よりともいはれず。茶経に神農におこるといふも、本經にのするゆへなるべし。茶経に又周公より世に聞へ、晏子・楊雄・司馬相如・韋曜、晋の劉琨・張載・遠祖納・謝安・左思が徒、皆これを飲りとあれども、周に始るともなし。晏子春秋・呉」(19ウ)志韋曜が伝各茶の事あり。春風堂隨筆には、漢に始るといひ、家礼考説には、晋より始るといひ、洛陽伽藍記には、梁の天監年中よりはじまるといへり。

しかれども、始る所さだかならず。周のすへよりすこしづゝ用ひ来り、漸に盛に成たるならん。和邦海人の藻芥に上古よりといへども、何をそれと証拠もなし。弘仁六年四月嵯峨天皇江州滋賀韓崎に行幸なりしに、崇福寺大僧都永忠、茶を煎じて奉りし事、日本後記にいたり。又後朱雀院のとき惟宗孝言、茶讃を作りて其能を誉しこと、続文粹に見へたり。

然れども、蜀山の産する所とあれば、是唐土よりきたる茶」(20才)を称するならん。茶湯記にはく、建仁寺開山千光国師・梅尾明恵上人同船して、入唐し同時に帰朝しけるが、茶の種を持かえりて、筑前国背振山にこれをうゆ。岩上茶と号す。上人これを梅尾にうつし、又宇治に移す。其事鳥鼠同穴集にあり。是日本に茶をうゆるの始にして、それより所々にひろまりけるならし。仁和寺・醍醐・葉室・般若寺・神尾、大和の室生、伊賀の八島、伊勢の河居、駿河の清見、武蔵の河越、江州信楽の数品、世人の知る所。高雄にも数種あり。東鑑に葉上僧正、茶一盞を大將軍実朝に献り、喫茶養生記をそえて捧しことあり。これは日本の茶を称するなるべし。今は上王」(20ウ)候より下衆民まで、日として茶を用ざることなくなりなき。春雨抄には、梅尾山の春の若くさなどいへる歌もあり。

又今和国の風に、婚姻の結納等の時、茶を副ることを礼とす。これ明の陳晦伯が天中記に、凡種茶、必下子移植、則不復生。故聘婦必以茶為礼。義固有所取也、とかきしより、俗この礼をとり用ゆると見へたり。

右の諸説を以ておもふに、後堀河院の御宇前後より、日本の茶は植初しなるべし。茶説は唐土より来る所の茶の事とみへたり。篤信曰、茶を飲こと、唐も大和も已にひさし。しかれども、是をことに

賞翫する事、もろこしといふとも、我国に及べからず。あさけのけぶりはすでに」(21才)なびきながら、夕のかしきに心あてなき人も、茶をのむ事は腹にみたずといふことなし。こゝを以て考みれば、今の世に甚茶をこのめる人は、朝より夕に至るまで、たゆることなし。煩を除膩を去の功あれども、又疾飲・痞脹・腹痛・洞泄等の憂をなす。

茶礼は後土御門院、文明十一年、足利將軍義政、東山東求堂に閑居し、銀閣を作て、北山の金閣に准ず。東山殿と号す。古器古画を遊び、茶器を集て年月を送る。茶会の礼式等みな、東山殿よりはじまる。飲食するに礼なくんば有べからず。されば義政卿の茶会の礼式を立られしは、猶利あるに似たりといへども、褻汚たる古器を遊びて、其弊を後世まで残されけるは、大なる罪ならずや。」(21ウ)紹鴎までは器物も有にまかせて用ひ、さのみに奇を好まず。近き世にいたり、千利休と云もの出て、茶礼を興行し、無益の事を増添し、千貫二千貫の財を費して、茶器を交易せり。今世に及で、唐ものの茶壺、あるひは古き茶器一つを、千金を以て買求る人あり。

抑何の益ぞや。我その用たることをしらず。凶年飢饉に逢て、これを以て、寒士貧民を救ふといへども、一掬の米にしかざるべし。兵役軍陣に望で、これを以て、敵をふせぐとも、更に一矢の用に代

べからず。暴病沈痾を得て、これを煎じ服すると、命を救ふべからず。然れば、則ち用ゐる所、何事ぞや。新しきこそいさぎよくよけれ。古き器は口のけがれ手のけがれ、いと」(22才)きたなし。ことに、貴人などの玩ぶべきものにあらざといへり。

人にむつまじくせんとて、匣へ帯剣を禁じ、人の飲さしをのんではとせず、茶の香気に、うき世の酔をさまし、釜の泌音に、心気の濁りをすまし、禪道にたよりて、物我へだてなきを樂むこそ本意ならめ。つら／＼近世の茶道をみるに、社を結で相会し、たがひに其あやまち、又は物ずきをそしり、茶具を鬭弄するを以てこととし、其具の徳をも弁へず、名に吼、名聞になづみ、いかほど茶の本意をする人にも、大金の道具あらざれば、いやしめあなどり、わきまへしらぬ人にも、値の貴き道具多く所持すれば、これをおそれ、茶事は元来修身齊家に益」(22ウ)なきことをさとらず。東山殿銀閣に退居ありしも、家臣山名・細川の大乱をしづむることあたはず、其身將軍職にありながら、茶道坊主の仕業を遊び、天下の乱をのがれかくれしやうにて、風流のみにその身の本意は、とりうしなはれしに心もつかず、国家の大事のやうに、大切になづみおもふは、まことに千家の奴婢となるやうなものなり。

今時茶事に拘泥したる人は、多くの財宝を、器物又は風流の遊びに費し、先祖よりの家産を破り、貧窮に及ぶ人すくなく。誠に大

なる害といふべし。狂薬の害なしといへども、これ又ゆるがせならざるのことなり。つゝしむべきにあらずや。

遠里曰、両子あらずふことなかれ。酒の徳、」(23才)茶の害、茶の徳、酒の害、各これ酒にあらず茶にあらず。用ゐるところの人にのみ。万物皆しかり。金銀財宝は身をたすくるの物にして、富家は心もやすく、貧家は心もせはしきならひなれども、その良所をしらざれば、却て欲心に身を亡し、または財宝のために命をとらる。禾は命をつなぐのものがら、飽食すれば食傷食滯の疾となる。

惣て、才能多きものは、害もまた多し。礼は身を約にするものにして、人身礼にあざれば、上下・尊卑・老少・親疎の差等みだれて、国家おさまらざる程の事なれども、和を知て和せざれば、先王の道もおこなはれずとかやきゝぬ。茶を飲で茶の徳をしり、心をさやかにし心」(23ウ)氣をすまし、清幽のたのしみをなし、茶礼によつて人にむつまじく、器物に泥ず、あるにまかせて用、茶にのまるゝ事なく、酒を嗜で酒の徳をしり、憂をやぶり、血脈をめぐらし、養老のたのしみをなし、觀を合て人にむつまじく、酩酊を禁じ、燕郷の礼をわすれず、酒にのまるゝ事なくば、両生のこのむところ、各是なるべし。悪ども其善をしり、好どもその悪をしるといへば、われは両生の好をかねて、たのしまんか。

都て万物の害と益と、用る人の巧拙にあつて、その物にはあらざるべしといへば、両子いはく、おもはざりき。老兄の生をやしなはんことを告て、酒茗の功をあらそはん」（24才）とは。こゝろある人これをきかば、貝原先生の口真似なりとやいふべきなれど、これ又春雨のつれづれを消するの、たのしみとするなればとて、うちつれ立てかえりぬ。

居行子巻之三終」（24ウ）

（次号につづく）

（よしだ　つかさ・本学大学院博士後期課程、

日本学術振興会特別研究員DC2）